

# 中国語を母語とする日本語学習者のスピーチレベル とスピーチレベル・シフト : ディスコース・ポライ トネス理論に基づいて

馮, 荷菁

<https://hdl.handle.net/2324/4475215>

---

出版情報 : 九州大学, 2020, 博士 (学術), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 :

氏 名 : 馮 荷菁

論 文 名 : 中国語を母語とする日本語学習者のスピーチレベルと  
スピーチレベル・シフト  
—ディスコース・ポライトネス理論に基づいて—

区 分 : 甲

### 論 文 内 容 の 要 旨

日本語母語話者は、対話相手との人間関係、話題の性質や場面状況などに応じて、適切にスピーチレベルを選択できる。さらに、スピーチレベルを巧みに切り替えながらコミュニケーションを効果的に進め、人間関係を円滑に保とうとしている（谷口 2004a）。ところが、日本語のような敬語体系とスピーチレベル体系を有していない中国語を母語とする日本語学習者にとって、スピーチレベルを相手と場面に応じて使い分けることは大きな課題であり、日本語教育で習得が困難な課題の1つであるとされている。本研究では、母語場面と接触場面の談話データ（『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2018年版』）をもとに、母語場面の「ベース話者」と接触場面の「ベース話者」（学習者）が使用するスピーチレベルとスピーチレベル・シフトを比較した。その結果を宇佐美まゆみが提唱する「ディスコース・ポライトネス理論」に基づき、量的・質的双方の観点から考察を行った。

本研究は全10章から構成される。

第1章では、研究背景、研究目的および理論的枠組みについて述べた。

第2章では、用語の整理、本研究の用語の定義、用語の分類基準と分析単位の認定、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者のスピーチレベルとシフトに関する先行研究、母語話者と学習者の比較に関する先行研究を概観した上で、従来の研究の問題点を指摘し、本研究の課題を提示した。

研究課題は次の4点である。(1) 母語場面で、女性ベース話者と男性ベース話者が使用するスピーチレベルとスピーチレベル・シフトを比較する、(2) 母語場面と接触場面で、母語場面のベース話者と接触場面のベース話者（学習者）が使用するスピーチレベルとスピーチレベル・シフトを、対目上・対同等とベース話者の性別という2つの要因から比較する、(3) 母語場面と接触場面におけるスピーチレベル・シフトの「ポライトネス効果」を考察する、(4) 中国人日本語学習者のスピーチレベルとスピーチレベル・シフトの使用意識、使用状況と指導状況を分析する。（なお、「ベース話者」とはコーパス内で複数話者と会話をし、比較の基となる話者である。）

第3章では、本研究で用いるデータ、分析単位である「発話文」の認定基準とスピーチレベルの分類基準、コーディングの方法、記号凡例および分析手順を提示した。

第4章以降が分析結果とその考察である。第4章では、シフトの頻度など数量的な観点から、母語場面と接触場面における女性ベース話者と男性ベース話者が対目上・同等に使用するスピーチレベルとスピーチレベル・シフトを比較した。その結果、母語場面と接触場面における初対面会話において、全体的に無標スピーチレベルは丁寧体であったが、複数のベース話者の中で同等の相手に

対するスピーチレベルの使用に個人差が生じていることが明らかになった。

第5章では、個別のシフトの解釈から、有標行動と捉えられるダウンシフトを取り上げ、母語場面と接触場面の初対面会話におけるダウンシフトの「ポライトネス効果」を分析した。その結果、母語場面と接触場面におけるダウンシフトが、相手が心地よく感じる「プラス・ポライトネス効果」を有することをディスコース・ポライトネス理論に基づいて説明した。また、接触場面では、学習者の一部に相手が失礼だと感じる「マイナス・ポライトネス効果」を生んでいることが明らかになった。

第6章では、アンケート調査を通して、中国人日本語学習者のスピーチレベルとスピーチレベル・シフトの使用意識の問題点を分析した。その結果、初級レベルでは、中国人学習者はスピーチレベル・シフトの使用意識が不足していることと、上級学習者になっても、スピーチレベル・シフトをうまく使用できないことが明らかになった。

第7章では、談話完成テストを通して、日本語母語話者と中国人日本語学習者のスピーチレベルに関する使用を比較し、中国人学習者の問題点を分析した。その結果、母語話者は上下関係の社会的規範を重視する一方、学習者は親疎関係を重視しながらスピーチレベルを使用したことが明らかになった。今後の日本語教育では、中国人学習者に対話相手との上下関係に応じたスピーチレベル使用に関する指導が必要であると同時に、親しい相手に対する普通体の過度の使用を工夫しなければならない。

第8章では、中国国内の日本語専攻の大学生に広く使用されている3種の日本語教科書を分析することによって、中国人日本語学習者のスピーチレベルとスピーチレベル・シフトに関する指導上の問題点を考察した。その結果、初級教科書では、丁寧体と普通体およびダウンシフトとアップシフトを導入しているが、明示的な説明は見られなかった。また、中級以上の教科書では、相手との親疎・上下関係からスピーチレベルを考える運用練習が欠けていることなどが明らかになった。

第9章では、第4章と第5章の分析をもとに、ディスコース・ポライトネス理論の鍵概念（宇佐美 2008）を用い、量的・質的双方の観点から母語場面と接触場面におけるスピーチレベルとスピーチレベル・シフトを総合的に考察した。また、第6章から第8章までの分析結果を、中国人日本語学習者の意識上・使用上・指導上の問題点として総合的に考察した。

終章の第10章では、本研究の結論として第2章で提示した本研究の課題に対する回答と考察を示し、最後に本研究の意義と今後の課題を述べた。

以上の結果、本研究は、母語場面と接触場面における女性ベース話者と男性ベース話者の共通点と相違点を明らかにした。また、ディスコース・ポライトネス理論に基づいて、両場面のベース話者が使用するダウンシフトがもたらすポライトネス効果を明らかにした。さらに、アンケートによる意識調査、談話完成テスト、教科書分析などによって、中国人学習者の意識上、使用上と指導上の問題点を指摘したことは、先行研究では指摘されることのなかったものであり、今後当該分野の発展に貢献するものである。